

第56回日本公衆衛生学会総会特別講演 公衆衛生観念の根底にあるもの

阿部 謹也*

本日、第56回公衆衛生学会総会でお話する機会を与えられましたことは私にとって大変大きな名誉であります。私は30年以上西欧中世史の研究者として西欧社会を観察してまいりましたが、近年になって西欧社会と日本社会の比較に関心を抱いております。本日はその中で気がついたことを少しお話ししたいと思います。公衆衛生の課題というのは、現在わが国が当面するさまざまな問題の中で最も重要かつ興味深いものであります。それは環境問題やエイズの問題などの具体的な諸問題とともに学問のあり方について新たな問題提起となるからだと思われま

I 自然科学と人文社会科学

公衆衛生についてはここで申し上げるまでもなく、すでに世界保健機構が認めたウィンスローの定義*があります。改めて引用するまでもないんですが、今日の話の展開のためにあえて少し引用したいと思います。そこでは『環境衛生の改善や性病の予防、個人衛生の原理に基づく衛生教育、疾病の早期診断と予防的治療のための医療および看護業務の組織化、さらに地域社会のすべての住民が健康を保持するに足る生活水準を保証するような社会機構の発展を目指して行われる地域社会の努力を通じて疾病を予防し、生命を延長し、健康と人間的能率の増進を図る科学であり技術である』とあります。やや長いんですけども、そしてまたいろんなことが一遍に文章に入っていて複雑なんですけど、こういうふうに言われています。この定義を見ますと、公衆衛生という学問は、従来わが国で使われてきた意味での自然科学だけではないということが誰の目にも明らかだろうと思

われます。技術としての科学は当然必要であります。ここであげられている公衆衛生の課題ははるかに広く、社会機構のあり方や地域社会の努力も含まれていることになります。わが国においては、明治以降、学問は自然科学と人文社会科学に分けられて文科理科の区別がかつては高等学校において行われていました。いまでも文系、理系という言葉はごく自然に使われておまして、人によっては、たとえば何らかの話の際に「私は文系人間です」あるいは「理系人間です」という言葉がふつうに使われているようです。

しかし、いまでもありませんけれども、こういう区分は文化学術上の後進国としてのわが国特有のものであって、世界に通用するものではありません。つまり、文系、理系とか文科、理科という言葉は的確に日本で使われている意味で外国語に訳すことは難しいわけです。わが国にはリベラルアーツの伝統がないということがあるわけですが、こういう区分がどれほど多くの不都合をもたらして来たかということは明らかだと思われま

本日の話題とあまり関係がないんですが、たとえば動燃の原子力発電所の事故のニュースは耳に新しい出来事であります。その後の一連の不祥事もすでによく知られているところであります。私はこの問題はまさにわが国の学問体制のあり方にかかわる問題だと考えています。

なぜなら、原子力発電所の技術者たちはみな自然科学者たちであり、彼らはその分野に関しては専門家であります。私自身、柏崎も六ヶ所も見て参りましたが、そういう意味ではどこでも非常に優秀な技術者が集まっていると思われま

す。動燃の設備等ははまだ見ておりませんが同様に

* 一橋大学学長
連絡先：〒186-8601 東京都国立市中2-1
一橋大学 阿部謹也

* Winslow, C. E. A, The Untilled Fields of Public Health. Science n.s. 1920; 51: 23-33; Mod Med 1920; 2: 183-191.

思われます。専門家の立場から見れば一連の出来事は些細なことに過ぎない、無視することができると考えられていると思われまゝ。しかし、その事故のニュースが新聞に載りますと、国民の反響は彼らの予測をはるかに超えた大きなものとなり、そういう事態が繰り返されますと、些細な事故であっても隠せということになるのだらうと思われるわけです。

ここに専門家と一般人の間のギャップがあります。専門家が一般人としての教養を身につけていればそのような事態は起こらないわけですが、わが国では専門家は一般人としての教養すら身につけていない場合が多いのであります。というよりも、専門家としての意識はときに一般人の教養を無視し得るほどに強く、あるいは狭いとも言えるかと思われまゝ。あえて言いますと、社会科学の教養がないということが決定的なのであります。科学技術庁という役所がどれほどの社会科学者を抱えているか私は知りませんが、ほとんど専門職としてはいないのではないかと思われまゝ。こういうふうな明治以降のわが国の学問教育体制に根差す深い原因があつた種の事故の中にあつたと私は考えているわけでありまゝ。

ところで、医学も物理学も人間に関わる限り同じ課題を抱えていると思われまゝですが、公衆衛生という学問分野においては、先ほど引用しました定義からも明らかなように、自然科学と人文社会科学にはっきり分けることはできないと思われまゝ。今日、私が公衆衛生学会の依頼に応じてこの場所に参つたのも、このような公衆衛生という学問の特徴のためであります。私は西欧の中世史を専門にしておりましたが、最近では日本の社会と西欧の社会との比較研究を行っています。日本における人間関係と西ヨーロッパあるいはアメリカにおける人間関係の違いを明らかにしたいと思つているわけでありまゝ。そのためには歴史的に遡って見ていかなければなりません。その過程でいくつかの知見を得たと思われまゝので、本日はその中から公衆衛生にかかわると思われまゝの事柄についてお話ししようと思つています。

II 中世ヨーロッパの身体観と宇宙観

まず、ヨーロッパにおける事情について見ますと、中世の段階においては一方で古代の知識が人

間の生理に関する理解の一つの流れをなしており、この点についてはこれまでわが国で紹介されているところでありまゝ。古代の人間についての知識は、キリスト教の影響下で人間の楽園追放以前の状態を基礎とし、それ以後の状態の表現としての疾病の苦しみを経て救済の期待へと向かう回復の線というものが見通されていまして。分かりやすく言いますと、現世は楽園追放以後のいわば与えられた苦しみの時代であり、その一つの現れが病氣であるというふうに見られていたわけで、最終的には人類全体が最後の審判を経て救済される道に向かって行くという理解であります。

これはキリスト教の影響下で出てきている考えですが、ガレノスの生理学とかストア学派の哲学によって別に疾病の理論というものが据えられており、中世においてはイオン体液説となつて現れ、血液、粘液、胆汁といった理解、すでにご存知のような要素から成つて、人間は時間とか四季、春夏秋冬、年齢、天の方位と結びつくと思つていまして。こういった占星術とも結びつくような学問が中世人の身体観の一つの基礎を作つていまして。それだけではなくて、ヨーロッパにおける人間の生理についての理解は、もう一つの流れを持つておりまして、それはわが国であまり紹介されておられませんが、ゲルマンの系譜を引く身体観の捉え方でありまゝ。

それは庶民の中で伝えられているわけで、十分な形で書物とか論文になつておられませんでした。人間が生活している空間というものは二つに分けられるというものです。家を中心とし、家の周辺に広がる菜園、野菜とか小さな植物、菜園等々の野菜畑程度のもを植えている、そういうものを含んだ一つの空間が小宇宙（ミクロコスモス）として捉えられ、その外側に人間の力の及ばない空間が広がっている。この空間は無限の広がりを持つており、広がりとしては天体から星までを全部含んでしまふ。そういう大宇宙（マクロコスモス）という観念があつたのであります。この大宇宙というのは、身近なところでは畑と森を意味して、そこには悪霊とか疾病のすべての原因があり、また幸福とか不幸というものも、さらにまた個々の人間の運命もこの大宇宙から小宇宙に投げ掛けられるものだと思つていまして。捉えられていたわけでありまゝ。「マクベス」の中に「森が動く」

という表現がありますが、これは決してシェークスピアの独創ではありません。シェークスピアという人は過去のさまざまな伝承とか、あるいは当時の人々のいろいろな民間信仰的なものをたくさん取り上げて作品にしておりますので、あの「森が動く」という表現もいま言った意味で大宇宙が決して固定された空間ではなく、朝になればずっと後退していく。しかし夜になると家の戸口まで森が広がってくる。大宇宙が広がってくるというのが中世の人々の考え方で、夜になれば戸を固く閉め、そして家の中に籠もってしまう。都市ですらそうであって、日本の時代劇などはかなり歴史的に不正確なものが多いので、江戸だって日本の場合には木戸を閉めてしまい、夜間の出歩きというのはほとんどなかったわけではありますが、ヨーロッパもそれは同様であります。

そしてこの大宇宙は、いまお話ししましたようにすべての不幸、幸運、病気等々の原因とされていたわけではありますが、占星術や中世の医療というものもこういう考え方に基ついていて、刺絡を行う時期は大宇宙の星の位置によって定められていたし、個々の人間の運命も生まれたときの7つの遊星や惑星の位置によってどの星の人間かということが生まれたときにすでに決まっております。それによって将来の職業も決まるとというのが15世紀あたりの書物や図版に出てくる考え方です。こういうふうな中世的宇宙観に基づく医療や身体についての考え方は、12世紀以降少しずつ変わってまいります。そのきっかけは何かといいますと、個人というものが生まれるということがあったからであります。

Ⅲ 個人の誕生

12世紀にヨーロッパでは個人が生まれたのであります。個人が生まれたということはどういうことかというのと、肉体としては当然のことながらアメーバとは違って人間の肉体は個体毎に分かれているわけではありますが、個人の意識というものが生まれてきた。それはどうして生まれたかといいますと、いくつかの要因がありますが、重要なものだけを取り上げますと、一つは告白、告解の義務化であります。カトリックの教義の中には、成人男女は少なくとも1年に一度は告白をしなければならないということが1215年のラテラン公会議

で定められました。この公会議は、その他の点でも、たとえばユダヤ人に黄色いバッジを付けろとか、その他の点でも非常に重要な会議であり、ヨーロッパのその後の展開を基礎づけた会議であります。そこで成人男女は少なくとも1年に一度は告白をしなければならないということが定められたわけでありまして、何を告白するのかということと自分が犯した罪を司祭の前で告白するわけです。

ところが、当時、12世紀の段階でも13世紀になっても何が罪かということは必ずしもすべての人に明確に分かっていたわけではありません。そこでペニテンシャルズ、贖罪規定書、罪の目録がありました。これは司祭だけが持っていて一般には公開されませんでした。何が罪かということについて詳しく文章になっておりまして、それに該当する人にはどういう贖罪のチャンスがあるかということが詳しく規定されている書物がたくさん出ました。それを見ますとわれわれが考えている罪と大差ないものもあるんですが、たとえば殺人とか傷害とか喧嘩、口論等が告白の対象になることはわれわれの理解と同じであります。われわれとは根本的に違うと思われ、日本の事情とも根本的に違うと思われるのは、性的関係が罪の大部分を占めていたということでありまして。

ヨーロッパにおきましては、カトリックの教義の下では、現在でも恐らく、正式には夫婦の間ですら性的関係を営むためには25のバリアをクリアしないと最後にはいたらない。詳しくここで申し上げる必要はないんですが、基本的には現在の人間は墮落している、罪に塗れているというそのキリスト教的発想の根底にあるのは、罪に塗れているということの具体的な表れとしての性関係を意味するわけです。これは日本人にはなかなか理解しにくい点ではありますが、少なくともこの頃に告白が義務化されたということはどういうことかという、成人男女が、一人一人が自分の内面についてはじめて自分で観察し、それを司祭の前で語るという義務を負ったということなんです。

つまり、性的関係というのは聖書にありますように姦淫の心を抱いただけで罪だということまで行くわけでありまして、現実はどういうことをしたかも含めて、現在ならばプライバシーの極致のような事柄を他人の前で喋る。これも、司祭というのは当時の教養水準から見れば一応高いわ

けであります。しかしこの時代の司祭はラテン語も十分に喋れずミサもあげられないような人もかなりいて一般庶民に近い存在であったわけで、そういう人の前で自分のプライバシーの一番重要な部分を語るということが義務化された。言い換えれば自分の内面を語ることを義務化されたということは大変重要なことで、フランスの哲学者のフーコーという人は非常に重要なポイントとしてこの告白の義務化を挙げています。

自分の内面に目覚めたときに初めて個人が生まれるわけでありまして、それ以前に個人がいなかったわけではないという理解もあり得ますが、それ以前の文献等々を見ますと、古代の一部の文献を除いて、たとえば10世紀から13世紀までのアイスランドの様々な事件を描いた叙事詩あるいは散文としての作品がサガとして残っておりますが、そこでは個人の内面はほとんど描かれていません。内面を描かずに人間を描いているものであります。サガには個人の名前は7,000も出てきますから個人というものが位置づけられているように見えますが、全く内面が描かれていないという点が特色であり、その点ではアイスランド・サガにはまだ個人が登場していないと私は考えています。個人が登場していないということはどういうことかという点、みな集団の中に生きていて、しかも集団の中での約束事に従って生きており、その中で様々な行為をするその行為の律則というものは集団の中にある。個人の倫理感とかそういうものではないということです。個人の倫理感というものがあるとしても、それは集団の中にある約束事あるいは伝承というものに縛られている。

ところが、この頃にいまお話しましたように自己の内面に目覚めた個人が生まれてくる。この証拠はいろいろありますが、一つにはたとえば岩波文庫で翻訳がある「アベラールとエロイズの往復書簡」を挙げることができるかと思えます。アベラールという人は40歳、エロイズは18歳。アベラールは聖職者ではありませんが、神学者として聖職者に準ずる暮らしを送っている高名な学者であります。そのアベラールがかなり意図的に18歳のエロイズに近づいた。エロイズという人はギリシャ語まで学んだ当代一流の女性でありましたが、そこで二人が子どもを産むわけですが、しかし結婚はしないとエロイズが頑張

って、アベラール自身を聖者にしたいという、そういう願望が強いために結婚なんかして縛るつもりはない。自分はアベラールのいわゆる妾でよろしいというふうについて、この二人の間の往復書簡がいろいろな面白い観点を出しているわけですが、ここには明らかに個人が生まれているといえるわけでありまして。

こういうことを前提にしてヨーロッパでは、たとえばこの頃初めて恋愛というものが生まれたといわれています。日本の歴史家たちに日本では恋愛はいつから生まれましたかと聞いても、たぶん捗々しい返事は返って来ないと思われまます。日本の場合は恋愛という言葉がヨーロッパとは違う意味で用いられているからであります。恐らく日本史の研究者に聞いても、それは人類と共に古いの言うかも知れません。しかし、ヨーロッパの学者に聞けば、恋愛は12世紀に生まれたとはっきりいうと思います。南フランスに初めて宮廷風恋愛というものが生まれた、その背景には個人が生まれたという事実があったと。個人がないところには恋愛はないというふうに彼らは考えているからであります。この問題自体は本日の問題と直接関係がないのでこれ以上は話を進めませんが、もう一つ個人が成立する背景として注目すべきことは都市であります。

IV 都市と個人

都市が成立したということと個人が生まれるということとの間には関係があります。それ以前は人々はだいたい農村といってもいいような環境の中で暮らしていて、父親の職業を継ぐのが息子の当然の道であったわけでありまして。しかし、都市ができますと、農村からそこへ出て行ってそこで何をするかということは個人の選択の範囲に入ります。たとえば、アベラール自身はフランスの田舎の騎士の家で生まれ、当然、騎士の跡を継ぐべき人間でありましたが、当時、すでに貴族とか騎士には二つの道がありまして、一つは親父の跡を継いで騎士になるか、あるいは教会に入って坊主になるかですが、アベラールはそのどちらも選ばずに、パリに出て、そこで学問をしようとした。そういう道が可能だったので。貴族でなければ都市に出て行って手工業者になろうとし、職人になるという道もあったわけでありまして。つま

り、自分の職業、一生の生き方を自分で選択できるようになったということが個人の成立の背景にあるわけでありましたが、この頃、ヨーロッパ各国で少しずつであります。個人が生まれてきた。その個人をどういうふうに国家や社会の中で位置づけるかという扱ひ方の違いというものが各国の経験となり、それぞれの国が個人に対して、基本的には似ておりますがやや異なった政策をとって対応してきた。その違いがイギリス、ドイツ、イタリア等々の近代史の内容をなしていると私は考えています。

こういうふうに、個人の成立が哲学や政治学、その他の分野に及ぼした影響には極めて大きなものがありますが、ここでは公衆衛生の観点に絞って見ますと、身体の位置づけに影響が見られるわけです。あらかじめ先取りしてお話しますと、ヨーロッパにおいても12世紀まで日本と諸事情はほとんど変わりませんでした。私は個人が成立する以前のヨーロッパと日本には本質的な違いはなかったと考えています。ヨーロッパで個人が成立した結果どのような変化が起こったかといえば、まず一番分かりやすい仕方を見れば、お風呂の入り方、入浴の仕方に変化が生じたということだろうと思います。

12世紀に個人が成立したといっても、それがヨーロッパ全域に認められるようになるまでには数世紀を必要としました。16世紀になると、入浴の仕方に大きな変化が起こっています。ジュールジュ・ウィガレロというフランスの人の言葉を借りれば、それまで入浴の目的は何よりもまず楽しむことであり、さらに社会の規則を侵犯することであったといっています。これはやや突っ込んだ理解ですが、どういうことかいうと、中世の版画にいくらかでも見られますが、男女が入り乱れて一緒に入浴する習慣というものは一般的なものであったと思われます。私が調べた限りでも、結婚式の直後に新婚の夫婦が先導して親類縁者や招待客を連れて公衆浴場を借り切って一緒に入浴するという場面がしばしば描かれていますし、男女が組になって風呂に入り、真ん中に板を渡し、そこに酒や食べ物を置いて遊興をしているという、これはいわゆる娼婦宿などに繋がっていくのでありますが、こういう光景はいっぱい描かれておりますし、入浴の習慣として現在ヨーロッパ人が否定

しているような混浴はある意味で当たり前だったわけでありまして。16世紀にはそれが大っぴらにはできなくなった。その原因についてもいろんな議論がありますが、梅毒の流行やペストの関係などがとりざたされているわけでありまして、分かりやすくいえば身体と身体との距離ができた、距離が離れていったということが一つ無視できない点であると思われまして。すでに見ましたように内面が規範化された。つまり、内面というものを人間は常に意識せざるを得なくなり、その内面を司祭という個人の前で公にするという日本人がかつて経験したことがないような経験を千年頃までにすでにし始めたヨーロッパの人々が、この頃上品さとか羞恥心を徐々に変えていくような環境のなかにあったということでありまして。プライバシーという考え方の基礎もこの頃に生まれたと考えられます。

男女も別々の浴室を使うということが、16世紀ぐらいから徐々にできてきます。当時の都市を考えてみますと、都市には自然というものはほとんど見られませんでした。自然から離れたところに作られた人工的な空間が都市であったわけでありまして。日本の都市と違ひまして、非常に早い時期から石造りになり、夜になると時間によって、たとえば6時に最初の鐘が鳴って門を閉める。8時に次の鐘がなるとすべての飲食店や契約等々がそこで終わる。かなり人工的な時間によって縛られた空間であり、そういう意味では樹木とか畑とか菜園は多少家の中庭に取り込まれますが、基本的にはそういうものがない空間が都市になったわけでありまして。樹木も泉も自然の形では存在せず、木と石の建物がひしめいている状態が通常の都市の姿でありました。下水もなく、道路の中央に掘られた溝が下水の代わりになっていたわけでありまして。

人々は便器の内容を朝になると道路にぶちまけ、それを放し飼いの豚が食べるというリサイクルができていたわけですね。イタリアの都市などを歩いているときは、ふつうは男性は女性を内側に、つまり、道路とは反対側の家のほうに女性を配して一緒に歩くわけでありまして、イタリアだけは例外で道路のほうを歩かせる。これは半分、ほかの国の人が悪口でいっているわけですから事実かどうかは別問題でもありますが。なぜかとい

うと、今では、朝、便器の内容をぶちまけたりしませんが、ゴミを窓から投げる人が今でもいる。女性がゴミを被らないために外側を歩かせるということが冗談に言われるような状態、その伝統はすでに中世の頃にあったわけでありす。

豚というのは彼らにとってはかなり重要な家畜であります。豚も山羊も。したがって、都市の中でも家の入口に上の扉、下の扉と二つのドアがありまして、下の扉だけ閉める。そうすると、豚や山羊は出られない。人間は簡単に出入りができる。そして、家の後ろのほうに井戸があったり、あるいはそこに小さな空間があって、京都の町屋をご想像いただければ比較的似ているんですが、そこに豚が飼われていた。朝になって下の扉を開けると、中庭から豚が一斉に何頭も踊り出て、豚飼いが笛を吹くとそこへ集まって行き、牧地に連れ出されるというのが中世の光景であったわけでありす。

こうした状態が衛生上大きな問題であったことはいうまでもないわけで、中世以後の悪疫の流行にそれは表現されているわけです。1348年、1350年にペストが大流行し、ヨーロッパ全域で2,500万人が犠牲者になったといわれています。じつにヨーロッパの人口の4分の1に当たる犠牲者の数になるわけでありす。ポッカチオやペトラルカの経験はその文章で伝えられていますし、当時の人々の困惑ぶりが如実に示されています。このほかにもレブラの流行も甚だしく、13世紀にはヨーロッパでは二万ヶ所に及ぶレブラの収容所がありました。レブラの流行は都市景観をさえ変えるものだったわけで、患者は特定の場所に閉じ込められるということになり、さらにアントニウスの火として知られるライ麦への真菌寄生に由来する食中毒、こういったものもかなり頻繁に起こり、この中毒の守護の聖人として聖アントニウスが位置づけられ、この頃、まだ疾病に対する宗教的な対応が主であったことを伺わせるわけでありす。

こういうふうな都市の衛生状態は19世紀まで続きまして、1826年の都市パリの衛生についても、公道上に塵芥や汚物が捨てられ悪臭が立ちのぼっていたという記述がありますし、ベルサイユ宮殿まで匂いが来たという話もあります。1834年にもコレラが流行し、死者一万八千人を出している。こうした社会的状態と個人の健康管理との間には

乖離があったということなんです。すでにお話ししましたように、個人の健康管理には古代以来の知恵が伝えられておりまして、13世紀には「サレルノ健康規則」として知られたものがあります。それは中世においては最も知られた健康の書でありました。そこには、たとえば次のように書かれています。『汝、逞しくあらんと欲すれば次に告げるところを聞け。心を圧する憂いを捨てろ。クヨクヨするな』と。『怒りとは卑しきことなり。わずかな食べ物のみを取りて強き酒には心せよ』。要するに『小食にして強い酒は飲むな。食を得たらば好んで立ち上がれ。』じっとしてはいけぬ。真昼の眠りを控えよ。昼間から寝てはいけぬ。尿を長く耐えてはいけぬ。『陽に働きを感じたらばこれに従え。われ汝に教えることをそのままに行えば長き人生を旅することにならん』。まあ、こういうふうなことが言われていまして、そのほかにも、『医師より良きものは3つある。それは原則として安静と明朗と節度である。安静にし、心を安らかに持ち、常に朗らかに節度を持った生き方をせよ』。食事の規則や入浴の仕方、葡萄酒の飲み方、性愛のあり方についても注文を付けながら、しかし、『生命を作るのは入浴、葡萄酒、性愛なんだからそういう意味ではこの3つについてはとても大切なものだからこれについても十分に心して飲んだり食べたり行ったりせよ』と、こういう叙述があるわけでありす。

V 日本の都市と衛生管理

それにもかかわらずヨーロッパの都市では衛生管理が上手くいかなかったのはなぜか。これが私の問いであります。そこでわが国の諸事情と比較してみようと思うのでありますが、残念ながらわが国の諸事情はまだ十分に分かっていないところがありまして、基本的な点にしましても不明なところが多いのであります。わが国の身体観の歴史についてもいまだ研究は十分とは言えない状況だと思えます。「古事記」や「日本書紀」にはいくつかの身体用語が出てきますが、血とか、月水、血、肉、肝等々に過ぎませんし、源順の「倭名類聚抄」にも身体についていくつかの記述がありますが、そしてまた後の時代にも継承されてきますが、いずれも名称に過ぎない。平安時代に「医心方」の書が紹介されているということがあ

りますし、それから梶原性全の書物「頓医抄」(1302-04)の中で、これは全50巻であります、その内の44巻に「欧希範五臓図」(1045)というものが引用されていますが、一種の人体解剖図で、これも基本的には中国のものの紹介であります。

ところが、「サレルノの健康規則」に当たるものもございまして、それは皆さんよくご存知の貝原益軒の「養生訓」であります。個人の養生の原則が説かれているわけですが、それを見ますと入浴の仕方から排便の仕方、食物について細々した規定があり、怒りと欲の二つが最も徳を傷つけ生を損なうとあり、細かい点では対応に違いは勿論ありますが、基本的には「サレルノ健康規則」と本質的に違ったものではないといつてよろしいかと思えます。しかし、わが国においては、ヨーロッパのような大規模な疾病の流行は報告されていません。むしろ、明治以降に外国から入ってきたコレラ等の流行が目立つほどであります。

都市諸事情がヨーロッパ中世都市の衛生状態を悪くしたということを申し上げましたが、都市化についてはヨーロッパほどではありませんが、わが国でも京都では早い時期に都市化が進んでいます。それにもかかわらず、京都においてすら疾病による大量死の報告はそう多くはないのであります。「方丈記」にある42,000以上の死者の記述は養和の飢饉による死者であって、その中には疫病の死者も含まれていると書かれておりますが、主として飢饉、そして地震であります。

こういう違いは何によるものかを考えてみたいのであります。ここで先に引用しましたウィンスローの定義が問題になるわけで、ヨーロッパにおいて医学も医療も早くからさまざまな形で注目されておりました。巡礼地には中世半ばにはすでに病院が建てられ、これがホスピタル、オピタルという聖霊病院という形で修道士たちが巡礼者を看取る、看護するという形で生まれてくるものでありますから、非常に早い時期にこういう病院の初期的な形態が生まれているわけであります。さらにまた介護する者として修道士がいたし、さらに先ほど申しましたようにレブラに対しては早くから隔離の措置が取られていて、都市景観の一部に組み込まれているということでありました。

そして、すでに見ましたように、個人の健康管

理については早くから規則等が生まれていた。しかし、個人の生き方と公的な生活との間との結びつきが自覚されていったのは18世紀以後のことでありました。ここで大変大事な点ですが、個人の生き方と公的な生活との間の関係が自覚されていくのは18世紀以降で、たとえばラマツィーニという人の「働く人々の病気、労働医学の夜明け」という本が出たのは1700年であります。この書物は日本語の翻訳もありますが、大変興味深いもので、いわゆる職業病というものの初期的形態について分析をしたもので、中には学者という職業がどういふ変な人間を生み出すかということについても詳しく書かれていて、この辺はわれわれにとってもなかなか興味深いところであります。この頃からヨーロッパにおいては衛生の観念というものが芽生えてきて、近代のさまざまな発見に導いていったのであります。

VI 公共性の東と西

わが国においてはヨーロッパのような市民的公共性は生まれなかったと、私は思います。しかし、市民的公共性とはいわなくても、公共性というものがそもそもない社会はないと私は考えます。公共性といった概念を詳しく説いたのはドイツの社会学者のユルゲン・ハーバマスであります。彼は「公共性の構造転換」という書物の中で注目すべきことを言っております。それは18世紀にヨーロッパでpublicity、ドイツ語ではÖffentlichkeitといいますが、こういう公共性という観念が生まれてくるが、それ以前にも公共性の萌芽的形態があったと言っています。それはあえて翻訳すると代表具現的公共性というんですが、分かりにくいので少し敷衍しますと、君主や領主が正面に立ち、その後ろに家臣がいるが家臣の姿はよく見えない。しかし、君主や領主がその国の公共的観念というものを一身に表し、農民や家臣は後ろに控えていて隠れているが、君主が公共性を体現するのを支えている、こういう状態。そして、その家臣たちは君主の前では自分の意見というものはないで従っているように見えるが、全体としてはそこで辛らうじて公共性が保たれているような状態、これを代表具現的公共性といっておりますが、当時の言葉を使えばこれは「世界」と呼ばれていたわけです。

一般の人々がいまいった代表具現的公共性という概念を使うわけではないので、それに該当する言葉を使うとすれば15世紀頃までは「世界」という言葉だった。これは大変興味深いことです。といいますのは、わが国にも公共性的観念はあったと私は考えているからです。つまり、日本の近代、明治以降の学問の世界では、公共性という観念を翻訳して、つまり、*publicity*とか*Offentlichkeit*を翻訳して公共性と言っています。公共性と言いますと何となくわれわれにはちょっと縁が遠いような、少なくともヨーロッパから来たものは全部私にはそういうふうに思われる。大学もそうですね。大学というのは *university* という言葉だった。これは本来、*universitas* で組合という意味であります。しかし、手工業組合の一つの一環として手工業組合の中のどこかに位置づけられるものとして本来大学が生まれたから *universitas* だったんです。ですから、東京組合、御茶の水女子組合と言うべきところを何となく大学と言ったために、権威がついたような印象を与えてしまう。翻訳というものの微妙なとか妙な影響であります。

この公共性という言葉も無理に訳されたからこういう言葉になったんですが、日本の中に公共性を発見しようという努力がされてこなかった。私は「世間」という言葉に日本の公共性は表現されていたと考えています。このことはすでに発表して半年ぐらいになります、何の反響もありませんのでたぶん理解されなかったか受け入れられなかったか分かりませんが、「世間」という言葉は本来は仏教用語であります。自然界の出来事と人間界の出来事を合わせて表現したもので世界を表していたわけです。それがわが国では鴨長明の頃、「方丈記」の頃に人間界の出来事を表す言葉となり、鴨長明の場合は特に京都における貴族の人間関係を示す言葉になり、かなり狭まったわけです。その後、この言葉は一般に用いられるようになりまして、江戸時代には町人たちも使い、そこでは町人たちが結んでいる比較的狭い人間関係を意味していたと私は考えます。

勿論、「世間」という言葉には本来の意味も多少残っていました。つまり、星とか太陽とか月とか自然、山とか川とか海も含んでいた概念ですから、これは「世間」という漢字を書きながら万葉

の頃から「世の中」と呼ばれておりました。いまでもわれわれは「世の中」という言葉を使うときにたぶん、「世」という字にひらがなの「の」という字を書いて「中」と書くと思いますが、明治の頃でも「世間」という言葉は、読まれるときは「世の中」と読まれていたわけでありました。そして、そういう意味では世界をも意味するわけでありましたが、当時の人々が考えていた世界自体、大変狭いものであったと思われまます。現在でもわれわれは「世間」という言葉を使います。そして「世間」という言葉を使うときにその「世間」の内容というものを一人一人は自分が使いながら考えていないと思いますが、それがたとえばアフリカや南米まで含んでいるとはたぶん日本人はだれも考えていない。恐らく、「世間」という言葉を使うときは、日本国内の諸事情の中での人間関係を表しているというふうに理解していると思われまます。

あえていうまでもないんですが、簡単に申しますと、明治10年頃に *society* という言葉を翻訳しなければならなくなったわけでありました。そのときに、当時の学者たちは苦勞をしまして30、40種類の訳語を考えた挙げ句、最終的に社会という言葉を採用したわけでありました。この言葉は中国に逆輸出されまして、いまでも中国では *society* の代わりに社会と使っておるわけでありましたが、本来は神社、寺等々を中心とした人間関係を意味していた言葉のようでありました。そして明治17年頃に *individual* という言葉を翻訳しなければならなくなって、そこで最終的には個人という言葉に翻訳されたわけでありましたが、江戸時代に高野長英はオランダ語については非常に詳しく、オランダ語の能力があったわけでありましたが、彼はオランダ語の書物を訳すときに *individual* に当たる言葉を翻訳できなかつた。そこで彼はそれを不可分のものと訳しました。これは正確な訳であります。本来、*individuum* というのは分けることができない最終単位という意味でありますから正確な訳ですが、日本になかった言葉に訳すことはできませんからそういうふうに訳した。

したがって、明治17年以降、日本人は個人という言葉を使い始めたんですが、そして明治以降の教育の中でヨーロッパ的な個人観念というものが小中高の教育では採用されていました。すべての

インフラが、つまり、法制度、軍政、司法、政治制度等々が全部ヨーロッパ化していく中で教育制度もヨーロッパ化しましたから、基本的にはヨーロッパ的な観念を用いて教育が行われた。その中で個人という言葉が教えられて、そこで個人の生き方について教師は、たとえば個人は大事なものだ。したがって一生自分の信念を守って社会がどんなに抵抗しようとも正しいと思った道を行けということを教えたわけであります。これは基本的には建前でしかないものを教え、そのために日本の子どもたちは大変苦勞をして今日に至っているわけであります。

私たちが使っている「世間」という言葉の意味は、自分が現在関係を持っている人々と、今後関係を持つかもしれない人々の全体を指すものであってそれ以外のものではないと思われまゝ。この「世間」という言葉は自己と切り離された対象としての人間関係を指しているのではなくて、自己と深く結びついた人間関係を指しているわけでありまゝ。「世間」という、関係の世界に自己が深くかかわっていて、いわばその網の目の一つに自己もなっているような関係です。「世間」はいわば有機的な結びつきを持ったものであって、その中の一つの網目を成しているのが自己であり、その自己が「世間」を変えるなどということは考えられない。日本人のこれまでの発想の中でさまざまな諺等々を見ていきましたが「世間」というものがいかに一人一人を縛ってきたかということは万葉の恋歌にもありますし、古今集からずっと現在に至るまでであるわけでありまゝですが、しかし、「世間」を変えなければならないという発想はどこにも見たことがありません。「世間」というのは常に所与として与えられているのです。

Ⅶ 「世間」と公共性

したがって、「世間」というものを変えようという意思是ほとんどみられなかったわけでありまゝですが、社会という言葉は、これは輸入され、翻訳された言葉でありますから、簡単に社会を変えようなんていう言葉が出てくるわけでありまゝ。社会を変えるということについては何の抵抗もない。しかし、「世間」については変えようという言葉が全く出てこないというのは、その「世間」と個人との結びつきが非常に深く、そしてまた独

特なものがあるからであります。「世間」は単に人間関係だけでなく、その関係とかかわるものや場などと深く結びついているということがあります。あくまでも人間関係が主となっているわけですが、その場とかあるいはそれにかかわるものなども「世間」を構成する重要な要素になっています。この説明が十分に理解されるためにはわが国にはヨーロッパ的な個人は生まれていなかったということを理解していただかなければなりません。

明治以降、わが国はヨーロッパを範として教育制度を整備してきましたから、ヨーロッパ的な個人の観念も生まれていますが、それは本質的には不十分なものであります。インテリ諸公の中には日本の個人はまだ不十分であり、したがって個人を確立しなければならないと簡単におっしゃる人がいらっしやいますが、個人の確立とはどういうことを意味するのかということをお聞きすると、一つの線はヨーロッパ的な個人を作れということになります。私はそれは不可能だと思っています。不可能という意味は、ヨーロッパでは先ほど言いましたように12世紀ぐらいから個人が生まれ、これは最終的にはキリスト教というものを根底に据えている。そこにかかわっているさまざまな伝承などはルターの時代に洗い流されて古代的なものを全部払拭されて個人と神との関わりの中で個人の位置が絶対化されていくという経験を経て、それが世俗化されて今日の個人になっているわけでありまゝ。

分かりやすい例を一つ挙げますと、たとえばドイツ人の家、フランス人の家でもいいんですが、お土産にたとえば夫婦茶碗なんていうものを持って行くとしまゝ。私の経験では夫婦茶碗を持っていったとき、これはたまたま家にあったのでお土産にいいと思って持って行って大失敗をしたわけでありまゝ。ある夫婦の家でそれを「差し上げます」と言ったところ、奥さんがパッと大きいほうを取って、「これが私の」というのです。旦那さんは何か不承不承というか、なぜ自分が小さいのかという顔をしながら小さいのを受け取って「ありがとう」と渋々と礼を言った。これは日本人と言ってもある年齢以上の人であれば、なんとなく理解できる。つまり、奥さんは小さいほうを取り、旦那は大きいほうを取る。そしてまた日本

の場合は、津軽塗りの箸でもみんな大きさが違う。大きい箸、小さい箸。小さい箸を旦那が取ることはまずない。そういう特異な文化的環境の中にいる人間が西欧化するとか国際化するとか言ってそういうものを持ち歩くと日本の伝承の全部を説明しなければならなくなる。それはとても面倒臭いのでそういうことはやめたいと思っておりますが、そういうことがわれわれの周囲にはたくさんあるわけです。

つまり、個人として妻とか夫が位置しているんじゃないで、夫婦という単位でいる。さらにまた、そこにはある種の価値の上下まである。そういう意味ではヨーロッパ的な教育というものを受けながら日本人はそれを建前としてしか受け止めてこなかった。私個人の経験から言いますが、中学校の教師は、たとえば卒業のときには社会に出たらいろいろな問題があるだろう、しかし自分の信念を持っているならそれを最後まで貫いて戦えなんて言ったわけです。私はそういうことはよう言えませんので、もし社会に出たときにそういう問題に直面したならば、その前にまず自分がどういう状況にいるかを見ると。どんな会社にも、どんな大学にもみんなそれぞれ世間があるんだと。自分がどの「世間」に位置づけられているかをちゃんと知った上で頭を働かせろ。頭を働かせるといことは知恵だと。知恵というのは建前とは違う。建前というものとは知恵とは別な問題で、知恵を働かせろ言うわけではありますが、日本の教育はそれを一切教えなかった。だから、あえて言いますと多少差し障りがありますが、私の教えた学生たちの中で小学校の教師を両親に持っている生徒は大変苦勞をしていました。

つまり、小学校の教師は建前を学校で説くんですが、それを真面目な教師ほど家の中でもやろうとする。これは実際上は不可能であります。日本の社会は一方で近代的なインフラストラクチャーを持っており、近代化しようとする流れを持ちながら、他方で家というあるいは「世間」という古いものを抱えているので、家に帰れば近代的な人間関係をそのまま出せない。その中で建前で生きようとする。そこから親子の苦勞が始まっているわけで、そういう例はいくらでも見ることができますが。わが国の個人が生きていく上での指針をかつては「世間」が与えてきた。そして、「世間」

に対して背を向けてはいけなことを教え、個人の生き方を縛ってきたといえるのであります。

Ⅷ 吉茂遺訓

この問題について、例はいくらでも挙げられますが、たとえば寛政2年、1790年に下野の国に生まれた田村治左衛門吉茂という男がいました。この男は農民であります。若い頃は親の言うことも聞かないで文字も覚えなかった。寺子屋にも行かず算数もできなかった。しかし、農業だけはきちんとやりまして、無筆無算で幼年時を過ごし、51歳のときに家督を譲って子孫に伝えることどもを書き記し、これが遺訓として残っているわけがあります。その中で、彼の苦勞というものいろいろ説明されていて、そこでは「世間」という言葉がしばしば出てきます。その用法は面白いことになっています。全部否定的な形で、たとえば「世間」を見れば金持ちであった人がしまいには長持ち一つさえなくなって破産する例があるとか、「世間」に対する義理を欠いては何事もできないとか、たとえ、実子だろうと義理を欠く人間に家督を譲ってはいけなとか、「世間」の義理を守ることが強調されています。さらに身を持ち崩す原因として大酒を飲むこととか色狂い、賭事が挙げられています。これは一般的にだれでもが知っていることがいっぱいありますが、そのほかに、たとえば小道楽として生半可な学問を鼻にかけるもの、特に数学、これは面白いですね。江戸時代には数学が日本ではかなり進んでいたということがありますが、生半可な数学者になってはいけな。訴訟を好んではいけな。理屈屋もいけな。芸事を好んでもいけな。庭いじりとか植木好きも、これも一番いけな。釣りや狩猟もいけな。名馬に凝ってもいけなし家の改築を好んでもいけな。道具に凝ってもいけなし朝寝坊もいけなし、夜更しもいけなし、見栄っぱりもいけなし。

こういうことはみないけなこととして挙げられていまして、彼の性格とか生き方を読み取ることができますが、訴訟を好むものや理屈屋が好ましくないものとして挙げられていることは、彼が「世間」に対して距離を取ろうとしていけなことを示していると思われま。いまでも、テレ

ビのコマーシャルで俳優が「理屈は嫌いだ」なんて言う、そういう場面がありました。理屈が嫌いだということを英語にしたらどうなるだろうかと考えますと、「世間」の中では理屈は通らないということを行っているわけですが、そしてまた親も子どもに対して理屈を言うなっていることを言うわけです。つまり、「世間」というのは理屈を超えた別な価値を持った人間関係を意味している。そういう意味で、この吉茂の遺訓やほかに彼が書いたいろいろな農業書を見ますと非常に面白い日本の「世間」の構造が見えてくるわけです。

したがって、その「世間」は個人の生き方に介入し、その生き方を最終的に裁く場となっている。日本人はいまでも常に「世間」がどう見るかを気にしながら生きていくわけです。ここで重要なことはその「世間」にもはや場がかかわっているということです。キリスト教が支配的だったヨーロッパにおいては人間が世界の中心にあり、その他の自然を含めた環境は人間のために存在していると考えられていました。そのような絶対的真理という考え方は日本には存在していなかったと思われまふ。したがって、たとえばヨーロッパにおける環境問題、環境汚染等々の元凶はキリスト教だということをとえばリン・ホワイト・ジュニアというアメリカの科学史家はマヒナ・エックス・デオという、ふつうは機械じかけの神と言われる言葉ですが、それを逆転した書物の中で挙げておりますが、それはある意味で面白い、注目すべき考え方です。

つまり、人間が主であって、そのほかの動物は人間と同じ価値は持っていないのだから人間のためにあるんだ、自然もそうだと、こういう考え方から環境汚染の原因が発生したという考え方には一理あるだろうと思われまふ。ところが日本人にはそういう絶対的真理という考え方ありません。いわば、アニミズム的であり、すべてのものに霊があり、すべての場にもその場の霊があると考えられていたわけです。したがって病に対する態度も単に個人の不摂生によるものとは考えないで、その個人が生活している場に問題があり、その個人が接したものに問題があると考えられていた。祈祷とかお祓によって病を退散させようとしたということもこういう考え方に基づくものであ

りますし、卑近な例を挙げますと、私は外国でも何年か暮らしたことがあります。たとえばドイツの町などでは家の前ははかなければいけないという、ほとんど規則のようなものがあります。あるいは雪が降ったときは自分の家の前の雪だけはいかしておかないとそこで滑って転んだ人が怪我をした場合に賠償を求められることがある。したがって、自分の家の前だけはパッチリと掃除して隣との間は段差ができるようにしておく。結果としてそうなるわけですが、日本の町を見てみますと、農村はよく知りませんが、私の家の周辺でも、道路の清掃を当番で決めてやっているわけじゃない。当番で決めてやっているのはゴミを集める場所がありますが、厨芥等々を集める、その場所の清掃は当番で何か番号札を回しながらやっていますが、そうではない自発的に道路を清掃する作業を特定の人が行っている。これは年配の人ですが、朝早く起きて周囲200 m ぐらい毎日清掃している。こういう慣習や考え方はヨーロッパにはあまり見られないものであります。つまりヨーロッパでは個人が生まれ、一軒の家が成立したときにその家の前の道路に対する責任は取るが全体を清掃しなければいけないというふうな発想は個人にはないし、そういうことを決めるのであれば順番を決めようとかクジにしようとかということになりますが、日本の場合は私の知っている限りでは、しばしばあちこちで見られますが、そういう個人のボランティアな活動の場になっていて、そのことをその人は決してほかの人に代わってくれとも言わず黙々として毎日やっている。

「世間」に示されている公共性のあり方は、ヨーロッパの場合とかなり異なっていますが、個人の生き方を規制し個人の行動に歯止めをかけている点では重要な機能を果たしているとも言えます。たとえば、水場というものがありますが、水場には常に神が祭られ神聖な場として位置づけられていたこと。これはキリスト教が入る前の古ゲルマンの社会ではベルイマンの「泉」という有名な映画がありますが、ああいうものにシンボライズされているような、そういう観念は非常に古い時代から12、3世紀まではあったわけです。便所でさえ日本の場合は神の場として定められていたことなどを考えますと、これは便所を改修するという考えたときに大工さんたちがどうい

儀礼を行うかを見ると分かりますが、必ずお酒とか何かを供えてそこで何らかの儀礼を行うわけがあります。こういうことを考えますとわが国のかつての人々の生き方は聖なるものと常に接した生活であったと思われまゝ。その点でヨーロッパにおいては中世の早い時期に聖と俗の分離が進行しました。俗が自由に闊歩し得る道が付けられたことはその後のヨーロッパの近代化を促進する要因になりましたが、中世の末から近代にかけて疾病の流行によって多くの死者を出した一つの原因でもあったと思われまゝ。

したがって、わが国でも聖と俗の分離が外見上は急速に進んだ明治以降にさまざまな疾病が流行したのだと考えられるわけでありまゝ。現在、私たちは「世間」という観念を相対化しなければならない状況にあります。「世間」の中に個が縛られている状況を脱却しなければいけないと私は考えていますが、しかしそれと同時に「世間」が持っていたかつての公共性的機能を失うことなく保持することができるかどうか大問題であります。もし、そういうものを無視して、つまり明治

以降の一方の近代化論者が言ってきたことはそれでありまして、ヨーロッパ的な近代的個人を作れということとはかつて持っていた「世間」のような聖なるものというものを排除して近代的個人を作るということになるわけで、そうすると伝統的な価値は失われるわけでありまゝ。私たちは聖なるものをもう失っているといってもよろしいわけですが、しかし、私たちの暮らしの中ではいまでもさまざまな形で聖なるものが生き続けているともいえます。それらをどう評価すべきかが今後の問題でありまして、今日は公衆衛生の歴史の中からヨーロッパと日本の違いについて、今のような違いを含んで一言申し上げたわけでありまゝ。まことに未熟な考えでありまゝですので、今後、いろいろ修正を施していかなければいけないと思ひまゝすが、こういう考えを公表する機会を与えられましたことをまづ御礼申し上げ、本日のお話を終わりたいと思ひまゝす。

(受付 '98. 2.24)
(採用 '98. 4.13)